
鬼ごっこしませんか。

羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼ごっこしませんか。

【Nコード】

N3039Y

【作者名】

羽月

【あらすじ】

元不良男子校に不本意ながらも真面目に通う女の子とその学校のトップに君臨する悪魔とのドタバタな日常物語。 『鬼ごっこシリーズ』の短編小説を連載化したものです。一話完結型。気まぐれ更新。

第一試合 ロックオンされました。（前書き）

短編だとリストがえらいこっちゃになりそうなので連載化しました。

この回は『Shall we play tag?』の改稿バージョンです。話の流れは一切変わりません。

どうぞ宜しくお願い致します。

第一試合　　ロックオンされました。

「ハッ……ハッ……」

「待てゴルアアアアッ!!」

「お前が来なきゃ俺らがヤバいんだよ!!」

「ハッ……ハッ……知るっ……かつ……ッ!!」

現在校内鬼ごっこ真っ最中。

……ではなく。

本気で追われております。物凄く追われております。

後ろから追って来るのは赤、黄、緑等々、色取り取りな頭をした不良な方々。私は膝丈のスカートを翻しながら校内を全速力で駆け抜け、彼らから逃がっている。

此処はとある有名な不良校。去年までは男子校だったのだが少子化に伴い、今年から共学になった。しかし元々有名な不良校なだけあって入学を希望する女子なんて滅多にいる筈も無く、その数は極端に少ない。つてかぶっちゃけ私を入れて女子生徒はたった3人しかない。要は不良男子だらけの無法地帯なのだ。

桐谷蒼依きりたにあおい、15歳。私はこの学校に通うつもりなど更々なかった。だが本命校の入試の日にインフルエンザにかかり、受けられる高校がもう此処しかなかったのだ。何ともお約束な展開だが、なってしまったものは仕方がない。ニートか学生か……それはもう苦渋の選

拵だった。悩みに悩んだが、私は腹を括つてこの学校に通うことを決意したのだ。

……今となつては後悔している。悔やんでも悔やみ切れない。

「待てつつつてんだろゴルアアアアツ!!」

「ハッ……ハッ……あーもう……くそっ!!」

対男だろうが足には自信がある。だが体力には限界というものがあるのだ。かれこれ10分程この全力疾走を続けているのだが、流石にもう限界が目の前まで来ている。

息は上がり、心臓が破裂しそうな勢いでドクドクと引つ切り無しに脈を打っている。勿論汗はたくさん。汗を吸った髪や制服が肌張り付いて気持ちが悪い。制服を絞ったら漫画みたいに汗が搾り出されること間違いなしだ。……もしかしなくとも今私は最高潮に汗臭くなかるうか。嗚呼、風呂が恋し過ぎる。今なら世界の中心で風呂きみが好きだと叫んでも良い。

しかしよくもまあここまで走れたなと自分自身を褒めてやりたい。頑張った。私頑張った、よくやった。

心の中では声援を浴びながらわっしょいわっしょいと私は胸上げされ、ついでにシャンパンファイトまでしている。そろそろ楽になりたい。だがそれは許されない。私は感覚を失いつつある足を叱咤して走り続けるのだ。

……奴らに捕まつてはいけない。捕まれば最後、奴らの親玉に贅として差し出されるのだから。

奴らの親玉、朝倉あさくら和斗わくとは三年生を差し置いてこの学校のトップに君臨している二年生だ。勿論不良的な意味で。喧嘩は馬鹿みたいに強いらしい。その上顔が整っている所以他校の女子や憧れの対象として男子にも大人気だ。その人気は留まる事を知らず、一部恋愛対象として好きな男子もいるらしい。……半端ないモテっぷりである。まあそれは兎も角、そんな奴にどうして追われているかというと

……つっかりやらかしてしまっただからだ。

一週間前、私は放課後窓から身を乗り出し、黒板消しを力の限りばっしばっしと叩いていた。前回の奴……というよりそもそも掃除をまともにやる奴なんていないからだろう。叩けども叩けども中々チョークの粉は取れなかった。立ち上る白い粉塵が容赦なく私に襲い掛かる。なるべく吸わないようにしていたのだが全く息をしないということは不可能。予想通りそれが鼻に侵入してしまい、思いつ切りくしゃみが出た。それも親父顔負けのやつを、だ。

思いつ切り出したただけあって気分はスッキリ。だが何か違和感が。手を見ると握っていたはずの黒板消しが一つ姿を消していた。あれ？と思ったその直後、下からばふんという音。……何やら物凄く嫌な予感がヒシヒシと。

逃げたい気持ちを押さえ、そちらをゆっくり伺うと……チョークの粉まみれになった男子生徒が立っていた。腕を上げている様子から彼は咄嗟に腕で直撃を防いだらしい。死角からの襲撃にも対応できるとは、なんと素晴らしい反射神経だ。だが降りかかる粉塵までは避け切れず、頭から被ってしまった模様。……お察しの通り、彼の方、朝倉和斗氏である。

一瞬の静寂の後、彼の周りを囲っていた不良の怒号が響き、次いで朝倉氏が私に視線を向けた。固まる私と彼の視線がかち合い、あ、殺られる？と引き攣った笑みを浮かべる。絶対射殺さんばかりに睨まれるかと思っただが………なんと彼は微笑んだ。

——それはそれはドス黒い笑顔で。

睨まれた方がよっぽどマシだった。アレほどの恐怖を私は知らない。周りの不良の怒鳴り声なんてそれに比べると可愛い子犬の鳴き

声である。それ程に実に恐ろしい体験であった。

それが私の平穩なる学校生活終了のお知らせのあらましだ。私、不運過ぎる。

それから一週間、休憩時間になるとこうしてずっと下っ端に追われ続けているというわけだ。

「くそっ！アイツ何処に行きやがった……っ！！」

不良さん達の足音が近くを通り過ぎ、次第に声が小さくなっていく。……上手く撒けたのかな。

そつと茂みから顔を出して辺りを見回してみたが誰もいない。私はホツと安堵の溜息をついてガサガサと今まで身を潜めていた茂みを出ようとした。

「見つけた」

「え？」

腰を上げようとしたところで誰かに腕を強く引かれ、身体が後ろに傾く。突然の事に対応出来なかった私は簡単にそのまま倒れてしまった。

「わわ……っ！」

来るだろう衝撃に備えて身を縮めたのだが何処も痛くはない。

どうやら私を引っ張った奴に抱き留められたようだ。私の腕を掴んでいる手と反対の手が後ろから抱きしめる形で私の腰に回って――

「……っ、これセクハラッ！！」

「ちよっ！！何すんの、この」

変態ッ！！

そう続けようと思ったのだが、私の言葉は最後まで続かず途切れてしまった。

そりゃ途切れるってものだ。怒鳴りながら勢いよく顔を上げて見た先には――

「……『この』、何？」

――朝倉和斗氏、その人がいたのだから。

驚きに目を見開き固まる私をニヤニヤと見下ろしながら、今まで私の腕を掴んでいた大きな手で今度は私の髪を弄ってくる。癖のない真っ直ぐなそれは肩程もないのですぐに彼の手からするりと零れ落ちた。その何かが気に入ったのか、何度も何度も繰り返す彼。

こんな至近距離で初めて見た。サラサラの金髪に色素の薄い茶色い瞳。顔立ちは物凄く整っていてアイドルも目じゃない………らしい。実は私、顔の判別が恐ろしく苦手である。アイドルグループだろうがクラスメイトだろうが最初は皆同じ顔に見えるのだ。何とか顔を覚えるまで凄く時間がかかってしまう。それまで声や髪型など顔のパーツ以外でしか判断出来ない。

……つかそんな事、今はどうでも良い。

何で此処に……！？

私はパニックに陥った。

ボコられる！？パシリにされる！？カツアゲされる！？私、今お金ないんだけどッ！！

ワタワタと暴れて抜け出そうとするが男女の力の差は歴然である。全く以って歯が立たない。

ギヤーギヤー騒ぐ私と後ろでクツクツと笑う彼。うひい、怖い怖い！！笑い方が怖いッ！！きつと今、彼はドス黒い笑みを浮かべているだろう。

怖くて振り返ることが出来ない。後ろに紛うこと無き悪魔がいる。暴れた事による汗だか冷汗だか分からないがとにかく汗がだらだらと出てくる。……ってか私今汗臭い疑惑が出ているんだっ！

「ちよっ！！うあっ！！お風呂っ！！」

「風呂？一緒に入りたいって？」

「違ッ！」

私はちぎれんばかりにブンブンと横に頭を振る。

「何でそうなるんだッ！！」

「汗ッ！！汗臭いッ！！私ッ！！放してッ！！」

私はいつから外国人になったんだ。

パニックで片言になる私をまたクツクツと笑いながら見下ろしている彼は一向に私を解放してくれる様子はない。

「あーもー！！放して！！いや、ホント放して！！」

乙女の尊厳を護らせて頂きたい！！

内心でも大絶叫しながらまた暴れ出す私をしつかりと拘束する朝倉氏。何を思ったのか彼は更に私を引き寄せ、密着してきた。

「ぎゃあッ！！だから臭いって言ってんでしょッ！！」

「別に臭くないけど？」

そう言っ て彼はあろう事か私の頭に鼻を埋め

「ぎああああッ!!」

「ッ!!」

私は近づいてきた彼の顔面に力の限り頭突きをかました。私の思わぬ攻撃に相手の腕が緩み、私はすかさずその腕を解いて逃走する。無理ッ!!色々と無理ッ!!

「うわああああッ!!変態いいいいっ!!」

何度か転びかけながらも私はそう叫びつつ死に物狂いで走ってその場を後にした。

「……………ククッ……………面白え女」

そんな私の後ろ姿を獲物を狙う肉食獣の様な目で見られていたという事なんて私は知らない。

第一試合 ロックオンされました。(後書き)

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
()

第二試合 追い込まれました。(前書き)

この回は『Could you play tag?』の改稿バージョンです。話の流れは一切変わりません。

どうぞ宜しくお願い致します。

第二試合 追い込まれました。

こんばんは、桐谷蒼依です。15歳です。

「ハッ……ハッ……ッ」
「諦めるよ」

只今校内鬼ごっこ真っ最中——ではなく。

真夜中に裏路地で鬼ごっこに参加させられています。因みに強制離脱できるものならとつくにしている。

「こうして見ると細えな……女みてえ」

前方10メートル程先でそう言いながらニヤリと嫌な笑みを浮かべる男は、彼のお方——朝倉和斗氏。

うん、まあ女だからね！なんて言える訳がない。

正体は明かせない。絶対に。

私はキャップの上から被っているパーカーのフードを引っ張り、更に顔が見えないようにした。

「さて、ソウ……その面、拝ませてもらおうか」

彼はそう言いつつ、その長い足でゆっくりと一歩一歩こちらに近づいてくる。

私は同じ距離分後ろに下がった。

—— やばいやばいやばいやばい。

背中にヒヤリと嫌な汗が流れ落ちる。

「……………ッ」

コツ、と下げた足に当る感触に思わず眉間に皺が寄る。
ズルズルと下がっていると踵が壁にぶち当たったのだ。背後に窓があるが此処は3階……………後がない。

そんな私の様子を見て目の前の悪魔がクツクツと笑いを零した。
「ここ、怖い怖い怖い！！だからその笑い方怖いんだって！！
内心あわあわとしている私を他所に、また一步悪魔が足を踏み出した。」

「……………ッ」

私、ピンチ。超ピンチ。

—— あんにやろっ！！護るって言ったのにッ！！

帰ったら蹴りに加えて平手も喰らわすと私は心の中で固く誓った。

「—— ククッ……………後がなくなったな？」

……………。

……………やっぱり怒らないから早く迎えに来て下さいiiiiiiii
ッ——！！

—— 事の始まりは一時間程前に遡る。

「あれ？ソウちゃんオヒサ〜。どしたの？」

「お、珍しいな」

「……あ、シンさん、タケさん。お久しぶりです」

コンコン、と軽くノックした後、ガチャリとドアを開けて部屋に入るとタバコの臭いと聞きなれた声に迎えられた。

最初に声を掛けてくれた長めの金髪がトレードマークなお兄さんがシンさん、そして後から声を掛けてくれた短い赤髪がトレードマークなお兄さんがタケさんである。二人ともジャラジャラとピアスなどのアクセサリーを付けまくり、不良スタイルバリバリであるが、凄く男前……らしい。周りの人が言っているのだから多分間違いないのだろう。

ドアを閉めて他に人がいないことを確認した後、私は被っていたパーカーのフードとその下に被っていたキャップを外した。癖のない黒髪がハラリと零れ、肩の上で揺れる。私はそれを手で梳きながら思わず出そうになる欠伸を噛み殺した。

因みに現在午前2時。良い子はとっくにおねむな時間である。

「……寝てる所を起こされて拉致られました」

私は不思議そうにこちらを見てくる二人に苦笑を浮かべてそう言った。それを聞いた二人は「ああ……」と私と同じような表情を浮かべる。

「またか……ソウちゃんお疲れさん」

「全くです」

「リヨクももうちょっと考えろっつもの。夜中こんな所に女の子連れてきやがって」

「全くです」

もっと、もっと言ってやってくれ。

私はガツクリと肩の力を抜いた。

リヨクというのは実の兄、桐谷碧きりたにみどりの事である。リヨクという呼び名は、本名の『碧』から取ったらしい。読みである『みどり』を『緑』に変換し、それを音読みで『リヨク』と名付けたようだ。

因みに私が呼ばれている『ソウ』も本名の『蒼』という字から取ったものである。ここにいる二人も多分同じように決めたとと思う。本名は互いに知らない。

その兄であるリヨクはここら一帯を縄張りとするチーム『蒼天』そうてんの総長である。規模は大きく、県内で1、2を争う大きなものだ。隣町を縄張りとする『森羅』しんらというチームとよく衝突をしている。こちらも負けず劣らずなでかいチームである。両チームの総長は大変仲が悪い。

まあそれは兎も角、何故私が此処——蒼天の幹部部屋にいるかという点、総長である兄に強制的に連れられて来たからだ。

スヤスヤと深い眠りについていて私を叩き起こし、着替えさせられ、拉致るかのように連れてこられた。……あ、着替えのときは勿論部屋から叩き出したが。

何故そんな事までして私を連れ出すかというと――

「ソウ、おまたせ」

「ふぎゃっ」

ガチャリと後ろのドアが開いたと同時に抱き込まれた。

誰だか見なくとも分かる。こんなことするのは……兄だけだ。

兄は私を後ろから抱きしめたまま身をかがめて機嫌良く私の頭にすりすりとなぐりをする。私はダラリと身体力を抜いた。もう諦めの境地に入っているのだ。

たかが妹にこの執着……そう、我が兄は生粋のシスコンなのである。

今日もツーリングがしたいから、一緒に居たいからと連れて来られたのだ。こんな夜中にとんだ迷惑だが、私はこの人の暴走を止める術を知らない。人間諦めが肝心である。家でいくらでも会えると思うのだが、兄は親を嫌って家に寄り付かないのでこういう事態がちよくちよく発生する。家に近づきたくないから夜中に私を連れて行けば良いんじゃないかね？といった感じだ。はつきり言って迷惑過ぎる。安眠妨害だ。……まあ何だかんだで連れて来られるのは私も兄を嫌ってないからなのだが。

「おいリヨク、そろそろ放してやれよ。ソウちゃん魂半分飛んでる」

「つか寝かせてやれよ」

「つと、悪い。眠いよな」

私が死んだ魚のような目をしていると二人が苦笑ながら助け舟を出してくれた。がっちり私を拘束していた逞しい腕が解かれ、私はようやく兄から解放される……と思ったらドアの前に突っ立っ

た私を通り過ぎ、ソファに座った兄がこちらを見ながらにこやかに膝をポンポンと叩き始めた。

……何だろう。嫌な予感しかしない。

「……何でしょう、お兄様」

「何って、膝枕。ほら、おいで」

ぼんぼんぼんぼん。

……この人は本気なのだろうか。……いや、本気なのだろうな。

何処に兄の膝枕で寝る妹が居るといふのだ……まあいるかもしれないが圧倒的に数は少ないだろう。

光のない眼でその様子を暫し見た後、私は兄の座っているものは反対側に位置した隅っこに置いてあるソファにゴロンと寝転がった。兄に背を向けるのも忘れない。

「……ソウ」

「おやすみ」

何か物言いた気な兄を一蹴りし、私は目を閉じた。眠ることはないが、こうすれば多少の疲れも取れるだろう。これがいつものパターンだ。

「ソウちゃん。アイツに見つかってない？」

その言葉に思わず肩が跳ねた。タラリと詰めたい汗が背を伝う。

例えば私が寝転がって目を瞑っていようと眠っているわけではないという事を皆知っているので用事や重要な事があれば普通に話を振ってくる。私は寝返りを打ちながら心配そうに尋ねてくれるシンさんをゆっくり見た。

「……………バレてはいません……………でもちよつと、その……………面倒臭い事態になっちゃって……………」
「何かあったのか？」

思わず苦い顔になる私に今度は兄が問いかけてくる。

出来れば隠したかったが、そうもいかない。私は観念してコクリと頷いた。それはそれはとんでもなく面倒臭い事態になってしまったのだ。

そんな私の様子に眉間に皺を刻みながら真剣な顔になる三者を見ながら、私は身体を起こして一週間前の事を話した。

一週間前……………朝倉和斗氏に目をつけられた経緯を。

朝倉和斗は我が不良校のトップでありながら隣町の総長も勤めている。
いる。

……………そう、うちのチームとよく衝突している『森羅』の総長サマとは彼の事なのである。

実は私、入学前から何度も彼に合った事があるのだ。

その時は兄のバイクの後ろに乗っていたので、今と同じ格好……………ジパン、そしてキャップに髪を捻じ込み、その上からパーカーのフードを深く被っていた。夜のスタイルはいつもこれである。男のような格好……………身元や素性がバレたら即狙われると兄が考案したのだ。だったら一緒に出かけなければ良いと思うのだが、兄が「絶対護るから」と聞いてくれなかった。泣き落としまで喰らって渋々了承したのだ。

初めて会ったのは二年前。その日も、兄とツーリングをしていたのだが、その時偶然朝倉和斗氏に会ってしまった。

そして彼の興味を引いてしまったのである。私、不運すぎる。

彼はそれから私の素性を暴こうとしている。

まだ正体はバレていないが、そんなときにあの黒板消し事件であ

る。私が同一人物だとバレたら………怖すぎるのでもう考えない
でおこう。

「……マズいな」

一連を説明し終えた後、タケさんが渋い顔でポツリとそう零した。
シンさんも同じような顔で考え込んでいる。そんな様子を見つつ私
は「すみません」と謝って乾いた笑いを零すしかない。

「……だから俺は反対したんだ」

ビクリと身体が震えた。

低い、それは地獄の底のような低い声でそう唸ったのは兄である。
彼は私が今通っている高校に行く事を断固反対した。理由は言わ
ずもがな、朝倉氏が在籍しているからである。しかし、例によつて
私はそこしか通えなくなってしまった。私だつて出来れば通いたく
なかつたが、通わなければニート……笑えない。それだけは頂けな
いと私は兄を押し切つて悪魔のいるあの学校へ通うことにしたのだ。
ホント、私、不運すぎる。

「……まだバレてないよ………一応。」

「時間の問題だ」

「だね」

「だな」

「うう………」

聞きたくない。そんなの聞きたくない。

私は耳を塞いでソファへ倒れこんだ。私の人生、終了したらしい
です。

影をこれでもかと背負っているとソファが沈んだ。

顔を上げると兄の心配そうな顔が見えた。ジーツと見ていると彼の大きな手がこちらへ寄ってきて、私の頭を撫で始める。いつもだったら軽く払い除けるが、現在絶賛落ち込み中なので甘んじてそれを受けた。

そんな私の様子を見て兄が口を開く。

「ソウ、外行くぞ。気分転換だ」

そういうや否や、兄は私にキャップとフードを被せ、いつものスタイルにした後、私を軽々と抱き上げた。わたわたと慌てる私を他所に、「行つて来る」と一言残して部屋を後にした。

ツーリングは楽しいから私も好きだ。頬に当たる風も気持ちが良い。

昼には滅多にバイクに乗せてもらったことはないが、私は夜の方が好きだ。行き交う車やバイクのテールランプが綺麗だし。バイクの音はバリバリと騒音を奏で、嫌いけれども。

私と兄は適当にそこらを走った後、近くのコンビニへ寄った。

「悪い、ちよつとトイレ」

「行つてらっしゃい」

私は兄を見送り、外に停車してある兄のバイクの傍で待つことになった。何となしに行き交う人達を見る。ここらはカラオケなどが集まった賑やかな場所だ。こんな夜中だというのに結構な数の人がいる。

わいわいと騒ぎながら歩く人達を見つつ、皆元気だなあとぼんや

り思っていたら、道路を挟んだ反対側でふと一人の男が立ち止まった。

私は無意識にそちらを見遣り——目を見開いた。

ニヤリと嫌な笑みを浮かべる金髪の男……朝倉和斗だ。

え、ちょ、待って、ヤバイ？ヤバイよね？

やはりというかあちらも気が付いているらしく、道路を悠々と渡ってこちらに近づいて来た。

「……ッ……！」

チラリと窓越しにトイレを見遣るが出てくる様子がない。ツリーング中に電話がかかってきていたから多分かけ直しているのだろう。私はもう一度朝倉氏の方を振り返った。ニヤニヤと笑いながらどんどん近づいてくる。

——捕まったらお終い。

今、強制鬼ごっこが開始された。

私は咄嗟に裏路地へと駆け出した。何とかして鬼を撒まこうと右へ左へと一心不乱に逃げ惑い、最終的に灰ビルの3階窓際へと追い詰められてしまったのだ。

……後から思えば、コンビニのトイレのドアを叩きまくってでも立て籠もっている兄を引つ張り出せば良かったのだが……パニックとは恐ろしい。

兎に角あの時は一刻も早くあの場所から離れたかったのだ。

「……お前はアイツとどういう関係だ？」

そそくさ正体を暴かれると思つて身構えていた私に朝倉氏はそう問いかけた。

アイツとは兄の事だろう。関係は……妹だけれども……言えない。というか答えられる訳がない。

声を出したら女だとバレるところか、下手をすれば私が桐谷蒼依だとバレてしまう。

私は声を出さずにジッとそのまま無反応でいた。

「……だんまりか……まあいいけど。アイツにとってお前が特別な存在って事は分かつてるし。服装は男物のようだけど……どうだかな。もしかしてアイツの女か？」

私はその言葉を聞いて即、^もげそうな程首を振つて否定した。

それだけは違う。やめて下さい。勘弁して下さい。

伝わったのかそうでないのか分からないが、彼は「ふーん」と言つて面白そうに笑みを浮かべた。女の子だったら思わず黄色い声を出すような笑み、私にとっては真っ青になって悲鳴を上げるような笑みを。……声を上げなかつた私を褒めて頂きたい。

彼はじりじりと私との距離を詰めていく。私は後ろに下がれないのでどうしようもなく、只その様子を見ているだけだ。

私と彼の距離が１メートルくらいになった所で彼は立ち止まった。

ドクドクと心臓が煩い。

「まあ、見れば分かることだ」

そう言って彼はゆっくりとフードへと手を伸ばしてくる。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ――

「ソウっ！！！！」

聞きなれた私を呼ぶ声。

馴染み深いバイクの煩いエンジン音。

それらが聞こえたと同時に私は咄嗟に地面を蹴り、後ろへ飛び退いた。

フードに指先が触れたが、構わず着地した窓枠をもう一度蹴る。

「……」

私は窓から飛び降りた。

強い浮遊感に悲鳴が出そうになるが、歯を食いしばり、何とかそれを押さえる。

風でキャップが外れ、髪が零れた。

私は慌ててフードを掻き寄せ、それを隠す。

—— 落ちる間際、かち合った彼の目は驚きに見開かれていた。

「……………あつぶね……………ッ！」

結構な衝撃と共にそんな声が聞こえた。

怪我はないかと聞かれ、コクリと頷く……………私は無事兄によってキヤッチされた。

バイクを滑らせながら受け止めてくれたらしい。知ってはいたが、やはり恐るべき身体能力である。

遅れてパサリとキャップが落ちたがもはやそれを拾いに行く気力はない。

私は安堵の溜息を零し、兄を見上げ——ビクリと身体を震わせた。

「デメエ……………」

兄が怒っている。

え、ちょ、怖い。物凄く怖いのですけれども……………ッ！！

今まで見た事もない兄の様子にビビりまくる私。空気がピリピリとしている。彼の視線の先を辿ると、私が飛び降りた窓枠に背を預けてニヤニヤと笑っている朝倉氏がこちらを見下ろしていた。

「只のお飾りかと思ってたら……………その子中々度胸があるね。気に入っちゃったからそれ頂戴」

「……………次会ったら……………ぶっ殺す……………ッ」

兄は朝倉氏の言葉には答えず、それだけ言つと私をしつかりと抱えてバイクを発進させた。

「……ッ！」

遠ざかる朝倉氏。

兄の肩越しに見えた彼は楽しそうに目を細め、私をずっと見ていた。

第二試合 追い込まれました。(後書き)

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
()

第三試合 強い味方が加まりました。(前書き)

今回いつもと比べたらめっちゃくちゃ長いです。

頑張ってください！

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

第三試合 強い味方が加わりました。

「ハッ……、ハッ……、」

「止まれゴルアア!!」

——皆さんどうも、こんにちは。

さてさて、今日も始まりました。恒例の強制校内鬼ごっこ大会です。

いつもの如く鬼は朝倉氏の下っ端全員……つまり参加者のうち私以外が鬼。逃げども逃げども遭遇するのは鬼ばかり……鬼畜にも程がある。

それでも今の所、全勝という輝かしい成績だ。凄いやね、私。インターハイも夢じゃない気がする。

「チツ……おい、お前ら例のルートで回り込め!!」

「ハイ!!」

「了解っス!!」

……後ろから不穏な会話が聞こえた。チラリと後ろを振り返ると、今日も赤、緑、ピンクと色取り取りな頭が揃っている。こんなところで鬼ごっこなんてしてないで、是非とも戦隊モノにでも参加してきて下さい。不良レンジャー……正義か悪か微妙なところだ。

……ってそんなくだらない事より、さっきの声……やっぱりあの入っているのね。

こつほぼ毎日追い掛けられると鬼の面子も徐々に覚えてくる。と
いってもやはり顔で判断は出来ないので髪の色や体付き、身長、声
などで判断するのだけれども。

先程指示を出した緑髪の人。最近この茶番に加わり出した不良さ
んなのだが中々に要注意人物だ。会話からして上の地位にいるとみ
た。森羅の幹部だろうか？

他の下っ端と比べると足は速いし、何より頭を使う。今まではた
だシンプルに追い掛け回されるだけだったので、こちらも走って逃
げるだけで良かったのだが、先程のように姑息な作戦を行使して
くるのだ。

昨日もそれで捕まりかけた……今度はどんな作戦なのだろう。気
を付けなければ――

「ハッ！掛かったな！！」

え？え？何！？

今、十字に別れた廊下を右に曲がったのだが、そこを曲がっては
いけなかったようだ。早速私は畏に掛かったらしい。

後ろをチラリと見るとニヤリと笑われた……こ、怖い……ッ！！
不良って何であんな笑い方をするのかな！？

視線を前に戻してとにかく走る。先は行き止まりで左に曲がれば
上りと下りの階段しかない。

現地点は2階だ。さて、下に下りるか、上へ上るか……。

「ハッ……、ハッ……、ん……？」

何だろつ、前方から沢山の足音がする……え、嘘、ちょっと待っ
て……？

顔面蒼白になりながら後ろをもう一度振り返る……勝ち誇った顔

をされた。……恐らくこの先には鬼が先回りしているのだろう。それも上り、下りの両方の階段に。

「……、」

タラリと背中に嫌な汗が流れる。

や、ヤバイ……ッ!!

階段まであと10メートルもない。後ろからは相変わらずカラフル不良戦隊が追い掛けて来る。私なんて追っかけてないで世に蔓延^{はびこ}る悪をやっつけて来て下さい。あ、そうなると自分成敗になるか！出来るなら親玉を真っ先に潰して下さいね！

混乱してまたもやどうでも良い事を考えつつも視線を辺りに走らせ、抜け道はないかとなんか頭をフル回転させる。

早く早く、何かないかな、打開策……ッ!!

あっ!!

「あつた!!」

私はそう叫ぶや否や、バスケット部もかくやという勢いで上履きを切れ良くキュッと鳴らしながら急停止し、窓に手を掛けた。

「なッ!!」

後ろから追ってきている不良さん達がギョツとした顔で驚いている。だが彼らに構っている場合ではない。

私は急いで鍵を外し、窓を開け放った。

下を覗き込むとジャストミートな位置である。珍しくラッキー！

「では、失礼します！！」

私は窓枠に手を掛けて跨ぐと、そのまま颯爽と身体を外へ投げ出しました。

「え、消えた！？」

「んなわけねえだろ！！……飛び降りたのか？」

「この高さをか！？俺だつて躊躇うぞ！？」

「じゃあ一体何処に……」

ワイワイと論議する不良達の声が二階から聞こえる。私の行方を探しているようだが、もう無駄だ。

私はもう安全地帯にいるのだから。

「うー、かなちゃん、いてくれて良かったあーっ！ありがとー！！」
「気にするな。葵も毎日大変だな」

泣きつく私を優しく抱きしめ、よしよしと頭を撫でてくれているのは篠塚加奈子、通称かなちゃんだ。そう、彼女はこの学校でたっ

たゞ人しかいない女子生徒のうちの一人、私の姉的存在である。同級生だけれども。

上でガヤガヤと騒いでいる私の逃走経路だが、勿論飛び降りたわけではない。そこらの家の二階ならともかく、学校の二階は構造上かなりの高さがある。下に兄がいるなら別だが、一人で跳んで下りられるわけがない。下手すると骨折ものだろう。

ではどうやって逃げたのか。答えは簡単、パイプにぶら下がったのだ。

窓を開けるとそのすぐ下に人が一人ギリギリ立っただけの足場がある。その下に太いパイプが横へ走っているのだ。足場に立っているだけでは逃げられない。引きずり込まれて終了である。だから私は足場に降り立った後、手を伸ばして下のパイプにぶらりとぶら下がった。下からだると丸見えだが、真上から覗いて見る分には足場で遮られ、私の姿は確認できない。

鬼達の視界から逃れた私はその後軽く窓を蹴って、目の前にいたかなちゃんに上窓を開けてもらったのだ。そこからお邪魔させてもらい、現在に至る。

「よしよし、怖かったなあ。もう大丈夫だ」

抱擁力満載な、かなちゃんに遠慮なく甘えさせて頂く。うう、女の子だよ。良い匂いだよう。柔らかいよう。

普段ゴツイ男共に追いかけて回されている身にとって女の子は癒し以外の何ものでもない。少々変態臭いが目を瞑って下さい。

たかが一時的に逃れられ、何故こんなにも私が安心していられるのか。それはかなちゃんに理由がある。先程安全地帯と私は言ったが、それは彼女自体を指すのだ。

喋り方は男らしいし、抱擁力抜群な彼女であるが、見た目はそれ

を真逆にした感じだ。背は150センチをいつているかいないかというくらいにちまつこいし、顔はとても可愛らしい美少女。背中に流れる茶色の髪はフワフワと波を打ち綿菓子のようにだ。そんな天使を再現したかのような彼女だが、何故か不良共は近寄らない。真つ先に絡まれそうな容姿なのに一切それがないのだ。本人にも聞いてみた事があるのだが「何でだろうな？」と笑顔で返されただけで真相は謎のまま。それは私の中で学校の七不思議の一つとなっている。出来るならばいつも一緒にいたい……しかし、悲しきかな、私と彼女のクラスは端っこ同士なのである。私が安全地帯に駆け込む前にカラフル不良戦隊に邪魔をされるのだ。しかし、二階からの侵入は考えてもみなかったのだろう。ふふ。

「……葵、すまんがトイレに行ってくる。大丈夫か？」

勝利に浸っていたらかなちゃんがすまなさそうにこちらを見上げてきた。う……可愛いな。こんな可愛い子を遠巻きにするなんてうちの男子生徒は馬鹿じゃないのか？まあ纏わり付かなくて良いのだけれど。

私はかなちゃんに「大丈夫、大丈夫」と笑いかける。でも、なるべく早く帰ってきてくれると嬉しいなつ。

いつてらっしゃーい、と手を振って彼女を見送った後、私は彼女の席と壁の間にうずくまった。たった数分くらいこうしていれば大丈夫だろう――

「見付けた」

……、そう思ってたんだけど、な……。

声と同時にぼん、と肩に置かれる大きな手。……何故かなちゃんと一緒にいかなかった、30秒前の私。

私は一瞬で石化した。……この声には物凄く覚えがある。

「迎えに来てやった」

……いえいえいえいえ、来なくて良いです……ッ！！
……ってか、何で居場所がバレたの！？

何処から……ハッ！！

私は徐に窓の外へ視線を向けた。

……ま、まさか――

「御名答。そこから面白れえもんが見えたからな」

聞いてもいないのに実に楽しそうな様子で答えてくれる。

……嫌な予想が見事に当たってしまった。

私の視線の先は隣の棟の屋上。お約束とばかりにその場所は不良共の溜まり場となっている。確かにそこからならば先程の騒動は丸見えだろう。

………っていつか、あの間抜けな姿を！！うおおおお！！は、恥ずかし過ぎる……ッ！！

脳内で悶え叫ぶばかりで実際には石化したまま反応を返さない私。その様子がおかしいのかクツクツと笑い出す背後の男。うひいつ、いつ聞いても笑い方が怖いよ……ッ！！もっと爽やかに笑えないの

かこの男はっ!!

油の切れたブリキの如く、ぎこちなく首を後ろへ回す。

そこには紛う事なき悪魔が微笑んでいた。

「んぎゃあああああああ!」

であー!ー!ー!ー!ー!ー!

それを見た瞬間、大絶叫して逃げだそうとする私。これは最早条件反射だ。

だが、肩を押さえられている今、逃げられる訳がなく……しかも、あるう事が軽々と肩へと担がれてしまった。

「んっえっ!」っと色気もへったくれもない声を上げた私はそのまま悪魔に連行される。

かなちや!ー!ー!ーんっ!!

辺りを見回すが、愛しき人の姿は見えない。

私は逃げるのを諦めて腹と肩の間に手を挿込み、ダメージを軽減してから身体の力をダラリと抜いた。

小牛を乗せた荷馬車の歌が脳内に流れる。私は一体どうなるのだろっ。

遠い目をしているうちにどうやら目的地に着いたようで、ストーンと地面に下ろされた。悪魔の背中一杯だった私の視界が解放される。

——屋上だ。

入口をチラリと見たが、既に下っ端によって封鎖されている。流石に屋上ともなればそこを通らないと脱出は不可能だ。本日何回目かの嫌な汗がタラリと背中を伝った……………万事休す……………ッ！！

「ようこそ、桐谷葵依ちゃん？」

急に名前を呼ばれて身体が恐怖でビクリと反応する。ゆっくり振り返るとニツコリとは言えない禍々しさで悪魔が笑っていた……………ここ、怖い。

彼は怯える私を気にする事もなくドカリと座り込んだ。屋上の一番奥まった場所……………恐らくそこが彼の定位置なのだろう。飲み物や雑誌などが周りに散乱して——

「……………ッ!？」

私の視線はある一点で止まる。

アレは——

「コレがどうかしたか？」

私の目が釘付けになったもの。ニヤリと笑って悪魔がそれを手に取った。

私の、帽子。

「気になる？」

探るように覗き込まれる。今更だがこの反応はマズイ。

「……………い、いえ、それだけこの場になんか浮いてるなと思いまして……………」

……………私は今どんな表情をしているだろうか。不良に囲まれている恐怖からくるものと取って貰えると有り難い。

内心バレないかとかなりあわあわしている。どうしよう、どうしたら、どうすれば。

この場所から今すぐ逃げ出したい。心臓はやけにゆっくりだがその脈は頭の中まで響いている。

「……………ふうん？」

やけに含みを持たせたような返事が返ってきた。

……………バレているのか、私の思い過ごしか……………まだ分からない。決定打に欠ける。

「ッ！！」

私の腕を掴み、引き寄せる悪魔。私と彼の距離が一気に狭まった。目の前にあるその表情は至極楽しそうだ。

尚も固まる私に彼はニヒルな笑みを浮かべて口を開く。

聞きたくない。

だが私にはそれを止める術を持っていない。

「
ねえ」

「葵ー、ここかー？」

——開く事はないと思っていたドアが開いた……いや、破れた。

ガァンツ、というけたたましい音と同時に聞こえたのは、この場にそぐわぬ鈴の鳴るような可愛らしい声。

それが耳に入った瞬間、金縛りが解けたかのように私はそちらを振り返る。

「か、かなちゃん……ッ!!」
「お、いた」

かなちゃんは私を視界に入れるなり、フワリと花が咲き誇るような笑みを浮かべた。

——うあああああ！ヤバイ、惚れてしまいそう！！かなちゃんも男の子だったら私、今この瞬間絶対に恋に落ちた！！かなちゃん、何で男の子じゃないの！？

思いもよらなかつた救世主の登場に頭が大混乱する。涙まで滲んで半泣き状態だ。

かなちゃんは私のそんな様子に「おやおや」と苦笑を漏らして屋上に足を踏み入れる。

そんな彼女の前へ、行かせまいと下っ端が立ち塞がった。

ちよ、この不良共！！かなちゃんに何かしたら許さないからね！？

「……ん？」

そう思った所でふと考える。今までは不良共は近寄る事もなく指一本彼女に触れることはなかったが今はどうだろう。奴らは彼女に戸惑っているようだが引く様子はない。トップがいるこの場で引くに引けないのだろう。

という事は……このままいくとかなちゃん、タダでは済まないのでは……？

サーツと私の顔色がなくなる。どうしよう、巻き込んでしまった。惚れてしまつとか馬鹿な事を言っている場合ではない。いざとなつたら私が身を呈して守るつもりだが、足に自信があるだけで軟弱な私ではそんな事をしても時間稼ぎにもならないだろう。結局巻き込んでしまふ……そして私と違って美少女の彼女はどんな扱いになるか分からない。

彼女の背後にある扉は開いたままだ。私は彼女にそのまま逃げてと目で強く訴える。

必死な私にかなちゃんが気付いた。私は更に強く訴える。逃げて早く逃げて！！

私のその様子にかなちゃんは一瞬キョトンとし、次いでフワリと微笑んだ。……あれ！？ちよつと、え！？伝わってない！？

出来れば他の奴らに気付かれなくなかったがそうも言っていられない。今度はブンブンと頭を横に振る私。

それを見たかなちゃんは苦笑した。え！？これでも伝わってない！？

「葵、大丈夫だ」

私とは正反対にかなちゃんは穏やかに言葉を紡ぐ。

いや、大丈夫じゃないでしょ！！

そう叫ぼうとしたが言葉は口から出ることはなかった。

——何故ならかなちゃんが手を自らの背に回し、制服の下からスラリと木刀を取り出したからだ。

え、ちよ、何ですかアレ！？

「退け」

木刀を構えることもなくブラリと片手に持ったまま、かなちゃんがにこやかに命令する。

不良共はビクツと肩を跳ねさせたが尚も道を開ける様子はない。そりゃそうだろう。華奢な女の子が武器を持った所で脅しにもならない。もしかしたら何発か喰らうかもしれないが、取り押さえて終了だ。

かなちゃん慌てる様子も見せない所か呆れたように溜息を吐き

出し、ゆっくりと木刀を構えた。

その動きにまた不良共の肩が跳ねる。……何で？

私がビビる不良共に首を傾げたその時——かなちゃんを纏う
空気が変わった。

「後悔するなよ？」

言っや否やかなちゃんは素早い動きで前に踏み込み、木刀を薙いだ。その攻撃を喰らった一人が呻き声を上げながら横に吹っ飛ぶ。

……。

……吹っ飛ぶ？

私はポカーンとその光景を眺めた。

かなちゃんは縦横無尽に動きながら的確な攻撃を繰り出し、一発で確実に敵を沈めていく。まるで舞を舞っているかのようなその動きに私は思わず目が釘付けになった。

かなちゃんを取り囲んでいたはずの不良共はどんどん数を削がれ、残り三人に……あ、一人死んだ。あと二人だ。

野郎共の怒号が飛び交う中、彼女のフワフワの長い髪とスカートが綺麗に宙を舞う。あれだけ動き回っているのにギリギリまで捲くり上がるものの、スカートの下は決して見えない……美少女故に絶対領域補正でもかけられているのだろうか。

ボケーンとしているうちに勝負が終わった。勿論かなちゃんの圧勝だ。

「終わりか」

つまらない、と言わんばかりに転がった不良共を一瞥しながらポツリと呟いた彼女は、前に零れ落ちていた髪を後ろに払いながらこちらに近づいて来る。

目の前まで来たかなちゃんは私が悪魔に腕を捕まれている事に気が付き、躊躇うことなく片手で木刀を振り下ろした。

すんでの所で私の腕を離し、それを回避する朝倉氏。離れた瞬間、今度はかなちゃんが私の腕を掴み、優しく引つ張って自らの背に避難させた。

「返してもらっぞ」

「……チッ」

……か、かなちゃん、惚れ惚れする程漢らしいね！！

ってか、かなちゃんって一体何者……？

かなちゃんは振り返って未だポカンとしている私を見た。

考えている事が解ったのだろう。彼女は気まずそうにしながら説明してくれた。

「私、警察官の娘なんだ。幼い頃から沢山の武芸を学んでいてな、この通り腕はそれなりにある。……今までに幾つか族を潰した事もあるんだ。面も割れている。だから不良共は滅多な事では私に近付こうとはしない」

七不思議が一つ解決した。

そついう事情があったのか……なるほど。ってか族潰しとか凄過

ぎるよ……!!

思考がいまいちついて行けず相変わらずボケーンとする私。かなちゃんは放心する私に今度は少し寂しそうな表情を見せながら続けた。

「……葵に今まで黙っていて悪かった。嫌われなくなかったんだ……怖いかな？」

その言葉に即、頭を横に振る。ビックリはしたけど怖くはない。寧ろ惚れちゃいそうです。

これだけは伝えたいと、私は口を開いた。

「……助けてくれてありがとう！かなちゃん、大好き！」

笑ってそう告げる私に彼女は驚いた後、破顔し、「そうか」と嬉しそうに言った。うひいっ！ま、眩しい……!!

「戻ろう」

もうここに用はないと言わんばかりにかなちゃんは私を引っ張って出口に向かう。しかし、途中まで来た所で私は足を止めた。

気付いたかなちゃんが振り返って不思議そうに小首を傾げる。

……私にはまだ心配事があるのだ。

「……怨み買ってかなちゃんが学校で酷い目に遭わない？」

恐る恐る尋ねる私に、かなちゃんは「ああ」と前置きした後、何でもない事のようにサラッと衝撃の事実を明かしてくれた。

「それは大丈夫だ。私と朝倉^{あいつ}和斗はハトコだからな」

……………え!?

ショッキング過ぎてまた放心する私。

今度は構うことなく、かなちゃんは笑いながら私を引っ張って屋上から連れ出していく。

その様子を心底詰まらなさそうな目をして朝倉氏は見送っていた……………らしい。

第三試合 強い味方が加わりました。(後書き)

お疲れ様でしたっ。

誤字・脱字などあれば報告して下さいると有難いです
(. . .)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3039y/>

鬼ごっこしませんか。

2011年11月26日23時56分発行